

子どもたちの自由な育ちを保障するもうひとつの 公教育をめざす虹の学園🌈のこと

一般社団法人 虹パーク代表 熊谷 貴典

安心できる居場所を求めて

2024年4月7日、市から旧一関市立花泉小学校の校舎を無償で借りて、フリースクール虹の学園は開園しました。開園式には、翌日から通園予定の親子、地域住民、地域の子ども会行事として、スポンサー企業、一関市議会議員や岩手県議会議員、教員仲間など、250人が集いました。

「私たちには夢があります」から始まった弁護士佐々木良博学園長のあいさつは「子どもたちが自由に育つために、どうかおとなたちも自由であってください」と結びました。廃校となった校舎を丸ごと使い、子どもたちの居場所がたくさんある教室。スポンサーから譲り受けた山羊3頭と鶏5羽を放牧している広大な土地。地域のみなさんからおすそ分けされる余剰作物から日々メニューを考えて作る昼食。自由でもあり自然を乗り越える試行錯誤の1年の報告です。



開園式は学園長が牛車で登場し、ナイジェリアのミュージシャンに作ってもらった学園歌に合わせて振り付けしてもらった輪踊りをみんなで踊った。

1. 虹の学園の理念と教育観

虹の学園の教育理念は2つです。

(1)子どもの要求と発達段階に応じたプロジェクト学習を通じて、生きる力を子ども自身

で獲得する場所と時間をじっくりと保障します。

(2)異年齢での協同と食育を通じて、比較や競争で子どもを追い立てず、他者理解と自立の芽を育てます。

ひとつのことに没頭して、できるまで他のことに手がつかなくなる子どもがいます。ピアノを弾き始めたら1曲弾けるようになるまで集中しています。壊れたオートバイをスポンサーからもらってきたら、何度も分解しては故障箇所を調べて直し続ける中学生がいます。ピアノと向き合っている時や、修理に集中できる場所が自分の居場所であり、主体性を取り戻している充実した時間なのです。昨年までは学校から帰ると「死にたい」と言っていた子どもは、1年間虹の学園に通い「母さん、俺、どこでも生きていけるから」と言ったそうです。

虹の学園の教育観は7つです。

- ①子どもはそもそも元気で個性豊かなカラフルな存在。比較で一色にせず元気にします。
- ②子どもの心と行動はグラデーションに成長していきます。理屈で割り切れない気持ちや行為を受け止める対話の努力をします。
- ③子どもの気持ちと力をあてにします。「やりたい！」と思った時が成長の出発点であり、学園の成長も子どもと共にあります。
- ④勉強は教えませんが体験学習はたくさんします。ただし、質問を受ければ教育スタッフは勉強を共にします。
- ⑤先生はいません。寄り添うスタッフがいます。
- ⑥地域の学校とは違って給食はありませんが、

毎日が調理実習で食育は豊かです。

- ⑦平日9時から午後の3時まで。いつ来てもよいフリースクールです。

2. 主体性回復のためのプロジェクト学習

昨年度全国で34万人と発表された不登校の児童生徒の多くは、幼少期から、または、学校において主体性を奪われた子どもたちです。子どもは生まれてからその行為行動は主体的なもので、それを肯定的に受け止めるか、否定的に受け止めるのかは周囲のおとなたちの問題です。子どもをまなざすおとなが意識的に子どもの主体的な行為を受け止め、子どもどうして遊ぶ時間を尊重しないと豊かに子どもを育む環境はつくられません。

虹の学園では学園づくりプロジェクトで存在要求を充すことと、チャレンジプロジェクトで発達要求を充すことを通して、子どもの主体性を回復させることを教育の方針としています。

(1)主体性の回復1：存在要求を充すということ

どんな子どもにもキラリと輝く一面があり、子どもに秘められた力が、活動や他者との関わりを通して発揮されることがあります。誰かにあてにされたり、今の自分の姿に共感する他者が現れたりした時に、存在要求は満たされます。学園では、毎日の自炊や植物の管理や動物の世話をしなければなりません。学園を運営するために子どもの力をあてにしています。それが学園づくりプロジェクトです。2学期からは同じ目的を共にする協同班ができ、各班の当番活動として学園づくりを分担しました。月曜日は花壇や芝の管理をする園芸班が自炊と醤油の搾入れと戸締り、そして、山羊の部屋の掃除をします。火曜日は建築商い班、水曜日は動物班が当番です。



岩手を代表する画家と共同したステージの壁画づくり。(学園づくりプロジェクト)

(2)主体性の回復2：発達要求を充すということ

4月のスタートに今年1年間でやりたいことを書き出しました。チャレンジ班がそれをまとめてスケジュール化し、毎週金曜午後の討論会で来週の取り組みとして提案します。何気なく子どもが呟く時があります。「養蜂をしたい」、「ツリーハウスを作りたい」、「けん玉の大会に出たい」など、子どもがやりたいと思った瞬間が教育の出発点です。蜂はどの方角を好んで巣を作るのか、どの木がツリーハウスには最適かなど、調べたり観察したり、失敗覚悟で挑戦し、思いを形にしてみ、失敗から学び、成功を他者と共にする体験を積み重ねていくことで発達要求が満たされていきます。子どもは本来、困難に挑戦するのが好きです。おとなよりもずっと豊かな感性で何かに取り組みます。何かに没頭する時間と場所を保障することはその個性を伸ばし主体性を回復することに繋がります。虹の学園のチャレンジプロジェクトはそのためにあります。

3. 虹の学園の子どもたちとその発達

虹の学園に来る子どもたちが学校に行けなくなった理由やそこに至る背景は大きく分けて3つです。「いじめの被害」と「7の個性が強い子ども」と「就学前の発達の課題」です。

(1) いじめの被害

比較や競争に追い込まれたり、トラブルやケンカの後に仲直りをして出会い直すことを学ぶことができていなかったりする子どもたちは、ストレスを抱えると自分よりも弱いものを攻撃する傾向にあります。家庭教育にも一律の宿題提出が求められ、地域教育やスポーツ活動なども学校教育と密接に関係がある日本社会では、学校内外で受けた迫害が教室にまで持ち込まれるケースが多々あります。そういった状況から避難した子どもたちは、学校生活と同じことを求めています。勉強がしたいし運動もしたいのです。心の傷が癒えぬままに、自らの主体性を回復する前であっても、加害者に負けじと勉強をし、いつか見返してやりたいと焦っています。

しかし、虹の学園は学習塾ではないので、積極的に授業をすることはしません。料理、木工、裁縫、壁画づくりなどのプロジェクト学習で、他者との協働や対話する日々を通して、少しずつ自分の個性を認識して、他者への基本的な信頼を取り戻す時間を大切にしています。小学生は元気を取り戻すと学校に戻る傾向にあります。いじめの被害の場合は、当然問題が解決しているのが前提ですが、学校や学級が変わるのをきっかけに復帰する傾向があります。中学生まで自己を傷つけられ、主体性を奪われた子どもたちは、幼少期に愛着の課題があった子どもと同じように他者を信頼することが難しく、共同作業や集団での話し合いも困難です。それでも中学生は自律的で責任感が育っており、当番活動やいったん納得して取り組み始めた活動は最後までやります。ただし、他者から評価されることは怖がります。料理を作った後はその場から立ち去り、できあがった作品についての感想も聞きたくはないそぶりを見せます。そういった気持ちに共感してくれる他者が少しずつ増えていくことで、自らを語り出しました。

(2) 7の個性が強い子ども

数字の7はまん丸の360度を1桁で唯一割り切れない、ちょっとめんどうですがラッキーにも例えられる数字です。学校ではいわゆるADHDやASD、LDという発達障害に仕分けされるような、多数派と同じように決まった時間に決まった場所で決まったことを割り切ってやるのが困難な子どもたちです。昔から発達障害とされる個性は一定数集団の中には出現していました。また、その子の親と話をしてみると性格や言動がよく似ていることを多々感じます。障がいなどではなく、性格的なもののようにも感じます。昭和の時代は多くの子ども集団の中で活動に余白があり、評価も相対的だったために得て不得手で収められていたことが、昨今の水平的画一化が進んでいる公教育の現場では、みんなと同じ内容を同じ方法で同じ結果を出すことを絶対評価で求められる傾向が以前よりも強まっています。その環境下では、多様化社会に期待と展望をもって飛び込んだ子どもたちにとっては、きっと生きづらいのでしょう。

虹の学園で時計や洗濯機を修理し、毎日太陽の下で「池を再生したい!」と言って砂利を掘り出していた中学生は、1ヶ月で主治医から薬を飲まなくてもよいと言われました。昨年度までは学校から帰ると「死にたい」といって自傷していた子どもです。学校に行くと「薬を変えたらどうですか」と言われ、病院に行くと「環境を調整してください」と言われ、その間で本人も保護者も苦しんでいました。1周年のイベントでは音響の操作と司会を担当しました。

読み書きは苦手ですが、家で動物をたくさん飼い、学園の山羊や鶏の変化によく気づく小学生がいました。木曜講座でお箏を弾いてみたらよい音を出して褒められ、お箏を習い始めました。3ヶ月後の文化祭で120人の前で一人で演奏しました。箏の先生の話では、他

の生徒さんよりも我流にならず音を素直に聞き分けて教えられた通り音を出す才能があるそうです。

7の個性が強い子どもたちは、環境によっては「障害」にされてしまいますが、虹の学園では「才能」です。指導しなければならないのは、変化しなければならないのは人なのでしょうか、社会の仕組みなののでしょうか。子どもたちから考えさせられます。

(3) 就学前の発達の課題

子どもたちが育つ環境は年々厳しくなっています。「便利は退化」という言葉があります。人間の脳のほとんどがつくられる6歳までの間に、スマホやWi-Fiによる電磁波被害が増えています。子どもは親の表情を見て喜怒哀楽を学びます。抱っこする親の視線がスマホに向けられている時、子どもは人間的な表情を吸収することができません。猿と人間は動物の中でお乳の濃度が薄いそうです。長く抱っこされてお乳を吸っている間に、脳内でオキシトシンという心を穏やかにするホルモンが分泌されます。脳が発達しているのです。人間の子どもの立ち上がるのには時間がかかるのは人間として大切な脳の発達をアタッチメント(愛着)により促している意味のある時間なのです。

「失敗しない子育て」、「友だち家族」、「○○力」などの、子どもを早く上手におとなにさせようという情報が子どもを育てる責任のあるおとなたちへのプレッシャーとなっています。

幼少期には全能感が育まれる大切な時期があります。何をしても周囲に喜ばれ、受け止められ、何にでも自然と挑戦しようと行動する時期です。その「うんとめんこ(かわいい)がられる」時期に、「ダメ」や「早く」などのマイナスの言葉でせかされたり、生理現象をも

失敗とうえつけられてしまうと、常におとなに見守られて失敗しないように過ごすようになります。安心してひとり遊びをすることができません。ひとり遊びができないと同年代の他者とは遊べるようになる時期がなかなかきません。おとなから与えられたYouTubeやゲームを何度も繰り返している方がおとなしく、手放せなくなり、電磁波の影響を強く受けます。DVやネグレクトも全能感を育む時期を阻害し愛着障害となります。

そのような生育歴のある子どもたちは、他者との協同は難しく同年代で遊ぶまでも時間がかかります。それでも子どもにとって「遊びは学び」なので、学園では遊びに没頭させる時間と場所を保障してきました。少しずつ遊びの中から友だち関係がつくられていき、学園づくりの活動にも協同するようになっていきます。活動を始めると個性が輝き出します。他者に個性を認められると、「やりたい!」という言葉と共にチャレンジプロジェクトが始まります。他者との協同ができるようになると、山羊の糞掃除や自炊などの当番活動にも少しずつ取り組み始めました。

4. 自立に向けた線と面

スタッフミーティングで開園当初に共有したことは、「虹の学園が子どもたちにとって安心できる場所にする」とことと、「子どもがやりたいことに没頭させる(十分に楽しませる)」ということでした。いわゆるひきこもりと呼ばれる子どもは、自分の部屋や家が安全で安心な居場所です。虹の学園も子どもたちにとって安心できる居場所であれば、ひきこもりの段階から一步踏み出せる。そして、安心できる居場所に自分を受け止めてくれる他者が存在した時に、存在要求が満たされていき、子どもが本来もっている主体性が回復されていくと考えました。「○○をして遊びた

い」や「何か作りたい」という発達要求が出された時が主体性が回復された兆しです。

安心できる居場所ができて十分に遊ぶ時間や場所が保障された子どもたちは、その自分を受け止めてくれた他者(おとな)のことを理解し、自分なりに工夫して(楽に楽しく)活動を始める姿も見られました。

虹の子どもたちの変化を見てきて、自立に向けたひとつの「線」が見えてきました。

- ①自らを傷つけない居場所があること。
- ②共感できる他者の存在があること。
- ③活動や生活体験ができること。
- ④自己決定ができる人間関係が育まれる場所があること。

③の段階まで主体性が回復された子どもたちは、学校へ戻ることも含めて④を求める段階へと進んでいくようです。

教育の目標は「人格の完成」です。子どもの主体性は子どもの人格そのものです。虹の学園は子どもたちの主体性の回復という公教育の役割を担っていくもう一つの選択肢として、実践を通して問いかけていきます。そのような選択肢という支えが子どもたちの周りにもっとあったならば、子どもや若者たちの自立にとって豊かな社会となり得るのではないのでしょうか。

それは自立のための「面」が子どもたちのそばにある社会です。

- ①自らを傷つけない場所がいくつもあること
- ②多面性のある自己の一面であっても、そのままりアルに受け止めてくれる他者が何人かいること
- ③自分の力・個性・役割が認められる場所があること
- ④自己実現に向かっていく一步が保障される場所やそこでなら活躍できる場所があること



建築班が設置したストーブの薪を確保するために老木をみんなで綱引きして伐倒。



虹の学園について詳しくは、二次元コードからアクセスしてください

プロフィール

熊谷 貴典(くまがい たかのり)

- 1973年10月生まれ 51歳
- 花泉出身で地元の高校に入ることができず1年間盛岡で下宿浪人生活をし北海道の高校へ入学。
- 3年間の寮生活を共に過ごした友人が学園のスポンサーにもなっている。
- 昼間の大学に入ることができず中央大学法学部政治学科夜間部へ入学。発展途上国の平等な開発を研究するために仲間を集めて西アフリカのセネガルへ行く。
- 平等で豊かな世界の実現のためには先進国が途上国を搾取しない公正な社会を実現しなければならない、それは教育の力によってなされると考え岩手県の教員採用試験を受けて面接でそれを訴えても理解されず、8年かかって試験に合格。
- 浜民中学校が初任で岩泉町の小本中学校で7年教員をした時に、50歳で退職し自給自足の生活をしながら自由な教育活動を展開できるフリースクールの設立を考える。
- 地元花泉町に戻って千厩中学校勤務の時から教育長に廃校校舎を使ったフリースクールの設立を訴え、10年の準備期間で昨年4月7日虹の学園を開園。
- 現在、娘がいる花泉小学校のPTA会長2期目。

